

魅力ある高校への挑戦

No.1よりオンリー・ワンを目指して

生徒や保護者の期待に応えられる学校を目指して、多くの高校が改革に取り組もうとしている。地域にとってかけがえのない存在となるための高校の魅力づくりを考える。

新学習指導要領で学校設定教科・科目と「総合的な学習の時間」が新設され、高校の特色づくりを前提とした「学校選択の弾力化」が現実味を帯びた。選ばれる学校づくりが多く、高校での課題となっている。

目標設定と取り組み

- 目標例1 目標を持ち、自ら学ぶ生徒を育成する
- 目標例2 基礎・基本を確実に定着させる
- 目標例3 学問への高い探求心を育てる
- 目標例4 郷土に深い愛情を持った生徒を育てる

魅力ある高校づくりのステップ
学校改革プロジェクトを設置し、アンケートなどを基に自校の教育課題を明確にし、目指す方向を定める。それをS.Iとして全教師間で共通言語化する。地域へのアピールも必要

なぜ今、魅力づくりが必要か

なぜ今、魅力づくりが必要か

生徒の変化や地域の願いに
対応することが必要な時代

加速する
高校の多様化・
個性化の動き

かつて中学校では、偏差値による輪切りの進学指導が中心だった。だがここ数年、中学生の高校選定の基準が変わりつつある。例えば、これまでなら

取り入れた高校などだ。高校には依然として難易度によるランク付けが存在するが、特色づくりに成功した高校が偏差値ではトップではないにも関わらず人気を集め、従来から人気のある伝統校に肉薄する現象も起きている。

将来大学への進学を目指す生徒は、ほとんど普通科に進学したが、最近では自分の興味・関心の方向から英語科や総合学科など別のコースに進む者もいる。その背景として、高校自体の多様化が挙げられる。普通科以外のコースでも大学進学支援に力を入れる高校・学科が増えたことだ。もう一つは中学校の教師の意識の変化だ。ある進路指導担当の中学教師はこう語る。

こうした各高校の多様化、個性化の動きは今後も進行することが予想される。少子化に伴う生徒数の減少で、定員割れする高校も既に出始めた。高校の統廃合を検討する地域もある。一方で従前通り公立高校か私立高校かを問わず、お互いに競争しながら優秀な生徒を確保していかなくてはならない。また、中高一貫校や単位制高校などの新しいタイプの高校も増え、互いに競い合うことになる。そして地域差があるとは言つものの、総合選抜制度の廃止や、通学区の拡大などの高校入試制度の改革も全国的に進んでおり、生徒にとってはより学校選択の幅が広がっている。文字通り、保護者や生徒にとって魅力的でなくては生き残れないスクールサバイバルの時代を迎えた、多くの高校が実感している。

「成績ありきで進学指導をすることはなくなりました。その生徒が行きたい高校を重視した指導をしています」
そんな中、自らの魅力づくりに力を入れる高校も増えている。国際理解教育やメディアリテラシー教育の充実に

取り組んだ高校などだ。高校には依然として難易度によるランク付けが存在するが、特色づくりに成功した高校が偏差値ではトップではないにも関わらず人気を集め、従来から人気のある伝統校に肉薄する現象も起きている。

生徒の実像を的確につかむことが魅力ある高校づくりにつながる

特色づくりを考えるにあたって、生徒の実態、保護者・地域のニーズや願いに合わせた教育の実現を目指すことが何より大切だろう。周知の通り、一口に「今時の高校生」と言っても、そ

生徒の実像を的確につかんだ上で、高校独自の教育理念と目標を打ち立て（「スクール・アイデンティティ」の確立）、それに即した高校づくりを実践する。そして、目標実現のためどんなことに力を入れているのか、保護者や地域への説明責任を果たす。そんな高校が、生徒にとっても保護者にとっても魅力的に見えるはずだ。

	高校生		保護者	
	体験率	役立ち感	大いにやっつけたい	まあやっつけたい
ホームルームでの進路学習	95.1	45.9	28.2	53.9
進路の手引きや説明会の資料を読んだ	90.9	66.7	35.6	54.3
大学案内などで調べた	76.9	65.2	37.6	50.0
社会経済の変化について調べた	71.3	32.5	41.2	48.2
学部・学科研究をした	53.6	50.9	30.2	49.3
関心のある職業について調べた	52.9	56.4	29.6	50.0
職業（職種）の研究をした	40.3	42.4	19.2	45.6
学問領域の研究をした	34.2	34.1	18.3	44.5
ボランティアなどの社会体験学習をした	28.2	42.9	20.5	48.9
大学見学会に行った	23.3	41.8	32.0	47.6
職場見学会をした	22.0	38.0	18.4	43.0
企業や職場の調査・見学をした	21.5	32.1	15.0	45.2
勤労体験学習をした	21.1	39.8	18.9	42.5

ベネッセ文教総研「高校生の自己理解と進路展望」('98年)より

進路学習の実施率は高いが、役立ち感を高めることが必要だろう。保護者の進路学習への要求は全体的に高い。

目標設定と取り組み

生徒の実状と地域の願いに合わせた教育を実現

（目標例1）

目標を持ち 自ら学ぶ生徒を育てる

将来の方向を見い出せない 生徒をいかに変えるか

魅力ある高校づくりは制度の刷新を追求することではない。まず、自分たちの高校ではどんな生徒を育てたいのか、そのためにどんな教育内容の実現が求められるのかを深く考えることから始まる。そして、自校の生徒の実像、保護者や地域のニーズをつかみ生徒をどんな方向に、どのレベルまで引き上げていくか目標を設定する。次にその目標を達成するために、どんな取り組みが必要かを決めていく。

取り組み内容は、自校の伝統、強みや弱み、地域特性も十分に考慮に入れて考えたい。他校の特色づくりがうまくいっているからといって、安易に同じことを行おうとしても失敗につながりやすい。他校の成功はその高校、あるいはその地域ならではの特性に支えられ、それらをつまく活かし初めて実現している場合が少なくないからだ。

以下で魅力ある高校づくりに向けて、具体的な目標設定とその実現のための取り組み例をいくつか提示している。自校にとって真に目指すべき方向とは何かを考える参考としていただきたい。

最近の高校生の傾向として、進路意識が低く、将来の目標が持てないということが挙げられる。原因はいろいろと議論されているが、一つには高校生の社会的体験の乏しさがあるだろう。また、かつては両親が働く姿を見ながら自己の職業観や進路観を養ったが、今は自分の親の仕事も知らない生徒が増えているという。

もう一つは、未来に対する見通しの不透明感だ。高学歴社会の到来は、逆に高学歴でも安定した生活が保証されない状況を作り出し、難関大を卒業しても必ずしも高収入や高い社会的地位が得られるわけではなくなった。さらに実力主義の台頭で、出身大学名だけでは勝負できない時代になってきた。今後自分を見つめ、同時に様々な社会

問題に目を向け、自らの人生観や職業観を養う指導が一層求められる。

自分の将来像が描けない生徒は、当然学習への意欲も失いがちだ。進路意識の醸成は、学習意欲の向上にもつながる。実際に進路指導に力を注いだことが学習意欲の高まりにつながり、結果進路実績に結び付いた高校は数多い。

職業研究や大学研究を 効果的に組み合わせる

進路学習には、職業研究や大学研究、学部・学科研究などがある。さらに「自己の生き方」を考えさせる行事としては、社会人を招いての進路講演会がある。これらの取り組みを有機的に結び付け、生徒の進路観を育成し、同時にそれを高校の特色にすることも可能だ。例えば福岡県のN高校では、まず新入生全員に進路希望調査の中で、「10年後、20年後の自分」というテーマで作文を書かせている。次に様々な世界で活躍している職業人を20人近く招き講演会を実施。新聞記者になりたい生徒はマスコミ関係者の講演を、というように、生徒の関心に応じて講演者を選ぶことができる。一方で、「10年後の自分、20年後の自分」を実現するためにどんな学部・学科に進めばよいかを学部・学科研究を通して知っていく。

1年次の後半からは志望学部が設置されている大学のシラバスを活用して、カリキュラムや講義内容調べを行う。また、オープンキャンパスへの参加や企業訪問なども積極的に展開。こつこつた取り組みは地域の保護者や中学生からも注目を集め、優秀な生徒が数多く同校を志望するようになったという。進路意識を高める仕掛けとしては、小論文指導やディベート指導も様々な分野の知識を得ながら、生徒の価値観・目的意識を育てる点で効果的だ。発表の場を用意すれば、他者の多様な価値観に触れることができる。また、社会に触れながら、働くこととはどういうことが、自分はどうな仕事に向いているのかを考えるきっかけとなるインターンシップも、新たな指導の形として、今後注目される試みだろう。

（目標例2）

基礎・基本を明確にし 確実に習得させる

近年、生徒の学力低下を指摘する声が多い。「自ら考え、学ぶ力」を養いつつ同時に、その土台として学習の基礎・基本をしっかり身に付けさせること

が重要という議論がよくなされる。確かに、自らの知的好奇心をより深いレベルへ掘り下げるにも、まず基礎・基本の習得が条件となる。だが、高校段階において何をもって基礎・基本とするか自体、決まった定義があるわけではない。学習指導要領が基礎・基本と定義されているわけでもない。それゆえ何を基礎・基本と捉えるかは、各高校の裁量に委ねられることになる。生徒の平均的な学力レベルによって、教科書対応レベルを基礎・基本としたり、「難関大入試対応レベル」がそれに該当する場合もあるだろう。

可能ならば、各教科・科目で基礎基本として習得すべき項目を、いくつかのレベル別に体系的に整理したものを用意することが望ましい。この作成には時間と労力を要するが、もし「我が校の生徒に習得させる基礎・基本とはこれである」と生徒や保護者に具体的に示すことができれば、それも自校の魅力を高める要素の一つとなるだろう。また、学校設定教科・科目の設置な

どで、高校のカリキュラム編成の自由度が高まった。そのため、主要5教科に関しては「基礎・基本は各教科とも押さえるが、選択科目を増やすことで生徒の個性を伸ばす」ことを重視する方向性を打ち出すこともできるし、「全科目を満遍なく学ばせ、総合的な思考力や判断力のアップを図る」ことも可能だ。つまり基礎・基本をどう捉え、それに応じてどんなカリキュラムを組むかによって、より特色を出すことができるわけだ。それは生徒や保護者にも「あの高校に行けば、あんな教育が受けられて、こんな力を伸ばしてくれる」と受け止められ、特色づくりの大きな柱となり得る可能性を秘めている。

到達度評価を取り入れて 学習指導を刷新する

基礎・基本を生徒に習得させるには、前に述べたように「自校にとっての基礎・基本とは何か」を明確にする必要がある。それは学習指導要領や教科書、大学入試の分析を踏まえ学習内容を検討すると同時に、教育理念や目標を照らし合わせて決定されるものだろう。

一定の学力を確実に生徒に身に付けさせる手法としては、到達度評価を取り入れた学習指導が注目を集めている。到達度学習では、例えば世界史なら

「生徒が第一次世界大戦が勃発した背景を説明できる」というように、具体的な行動目標を設定。授業後は、生徒がその目標をクリアできているか小テストなどで確認する。そしてつまずきの見られる生徒には補習授業や宿題で対応する。こうして教室にいる全員の生徒が、最終的には当初の設定目標に到達することを目指す。教える内容を行動目標として体系化することで、教師にとっては何を教えたらいのかが明確になり、同時に生徒に対しても何を習得すればよいのかという学習の目標を具体的に示すことができる。*

基礎・基本を養うには、こうしたき

め細やかで粘り強い指導が必要となる。

（目標例3）

学問への高い探求心を 持った生徒を育てる

学問の最先端の テーマに触れさせる

学問への探求心とは、ある社会的事象や自然現象に対して「それがなぜ、どのようなメカニズムで起きているのか」を知りたいという自発的な欲求である。だが生徒たちは日々の授業の中で、そのような知的好奇心をなかなか発揮できない状況にある。

目標と取り組みのマトリックス	
（各教育目標を達成するために、どの取り組みが効果的か）	
明確な目標を持ち、自ら学ぶ生徒を育成	は、直接的に効果が期待できるもの。 は、副次的に効果が期待できるもの。 （内容次第では効果が期待できるものも含む）
基礎・基本を明確にし、確実に習得させる	
学問への探求心を育てる	
郷土への愛情を育てる	
広い視野を育てる	
社会のリーダーとなる人材を育てる	
国際社会に通用する人材を育てる	
情報リテラシーを育成	
etc.	
目標例	e.g. ボランティア活動 学校行事 生徒会活動 面談 習熟度別授業 到達度学習評価 環境教育 情報教育 国際理解教育 選択科目の工夫 ディベート指導 小論文指導 大学研究 職業研究
	取り組み例

ここに挙げた目標と取り組みは、あくまで例にすぎない。マトリックスの表示も編集部への仮説による。自校の目標を達成するためには、どのような取り組みに力を入れればよいかを考える際に、上記のようなマトリックスを作成して考えてみてはどうだろうか。

* 到達度学習の詳しい内容については、P8-9に山梨学院大学附属高校の事例を紹介しているので、参考して下さい。

特集
魅力ある高校への挑戦
No.11
オンラインを目標に

受験準備のための学習のみに捕らわれることなく、学問の最先端のテーマに広く触れさせ、その魅力を伝えることは生徒に学ぶことが主体的で楽しい行為であることを伝えることになる。さらに実際、生徒自身に課題を設定させ取り組ませることで、「自分自身で考えながら、答えを求めていく面白さ」も感じ取らせることができる。「正しい指導は「自ら学び、考える力」を養う点でも、高校の特色づくりの重要な取り組みの一つになるだろう。

生徒の興味・関心に応える 仕組みを追求する

学問への探求心を育てる手法としては、大学教授や研究者、OBらを招いて公開講座を開いたり、その高校の教師自身が選択科目の授業などで自らの専門分野をテーマに講義や実験・演習やゼミ形式の研究会を行うやり方がある。例えば青森県のある国語教師は、英語教師と連携して『源氏物語』の原書と英訳文を照合させながら読み込む課外ゼミを実施した。普段の勉強だと、生徒は文法や単語を覚えて訳すというレベルに留まりがちだ。だが『源氏物語』の原文には、どうしても英訳しにくい表現がある。それが生徒に日本語と英語、日本文化と欧米文化の根本的な差

異に気付かせ、言語に対する学問的な興味に向かわせるきっかけになったという。

「こうした取り組みの導入は、教師の配置や設備などの実現を可能とする条件の整備が必要となり、体制づくりが困難な場合も少なくない。多くの教師の理解と協力、そして地域やOB、および教育委員会などの支援を積極的に求めることが必要だ。

（目標例4）

郷土に深い愛情を持つ 生徒を育てる

「地域に有用な人材を」の 願いに応える

通学区の拡大や総合選抜制度の廃止で、多少遠距離でも、自分の学力で届く範囲で一番難易度の高い高校を選ぶ生徒が増えているようだ。しかし、地域にはそこで育った子どもは地元の高校に進学し、地域に有用な人材に育ってほしいという願いがあふれている。このように思いに応えるには、授業や特別活動を通して、地域の自然や産業、文化への深い理解と地域の人々のくらしへの共感を育む取り組みが求められる。このために、地域とより深く関わる魅力ある仕組みを持つことが必要だ。

魅力ある 高校づくりの ステップ

学校全体の合意形成を どのように進めるか

単に目新しさだけを追いかけても魅力ある高校づくりには結び付かない。生徒やその保護者、あるいは学区内の中学校や中学生が「学んで（学ばせて）良かった」「あの高校に進学したい（させたい）」と思える魅力の確立が大切だ。それには、新しい取り組みに向けて、いかに校内の合意形成を図るかがポイントとなる。一つのモデルとしてはあるが、合意形成を進める基本的なステップは以下のように考えられる。

STEP 1 学校改革プロジェクトを 発足させる

学校改革を行う際は、まず数名で構成する校内プロジェクトを設置する場合が多い。高校によつては「将来構想委員会」「21世紀ビジョン委員会」と呼

び、この組織が核となって現状分析や改善点の検討、目標の設定などを行う。

構成員は分掌や学年、若手からベテランまで偏りなく選んだ方が、全体を見渡した改革案を作成できる。熱意も力量もあるキーパーソンの活躍が、改革の成功を大きく左右することが多いので、意欲の高い教師が集まるよう、公募制を採ってもよいだろう。いずれにせよ大切なのは、熱意ある教師が十分力を発揮できる環境を整えることだ。また学校改革においては、それが抜本的なものであるほど、管理職のリーダーシップが強く求められる面もある。

STEP 2 自校の教育課題を 明確にする

現在の課題や周囲のニーズを把握するには、アンケートによる調査が効果的だ。対象は教職員、保護者、生徒、卒業生、近隣の中学校の教師、地域住民など思い切って幅広く設定した方が、自校の特性や課題を深く多面的に把握する上で望ましい。また、生徒の現状

地域の声を 反映させる仕組みを作る

地域の社会福祉活動、祭りや行事に参加し、住民と共に一つのことをやり遂げる体験は、生徒と地域の一体感を高め、生徒に地域への愛着心を育てる

中高一貫校や総合学科の登場が より高校の多様化を促す

98年、学校教育法が改正され、公立校においても中高一貫校を創設することが可能になった。中高一貫教育のメリットは、6年間を見通した計画的な指導が展開できる点にあるとされている。中高一貫教育を行う学校は、「中等教育学校」「併設型」「連携型」の三つに分類される。「中等教育学校」は6年制となっており、生徒は一つの学校で「貫して学ぶ」「併設型」は県や市などの同一の設置者が中学校と高校を設け、入試が課されることなく両者が接続されているというもの。そして「連携型」は、既存の市町村立の中学校と都道府県立の高校がカリキュラム編成や行事などで連携体制を結びつつある。いずれも学力試験なしで生徒は高校に進学できることになる。文部省は将来的に、高校の各学区に1校ずつ、つまり全国で500校程度の中高一貫校を設置することを目標としている。総合学科を導入する高校も現在123校に増えている。総合学科の魅力は、生徒が

をよりの確に捉えるための調査も必要だ。このような調査の結果から、やるべきこと（地域の期待、生徒の現状）やりたいこと（教師の思い）、今やれること（高校の現状）がつかめてくる。

自校の課題を鮮明にすることで、目指すべき学校改革の方向が明確になれば、合意形成も図りやすい。そして今後、どんな生徒を育てるためといった教育を実現するかをSII（スクール・イニテシアティブ）として明文化する。

STEP 3 SIIを全教師の 共通言語とする

SIIを立案したら、職員会議で十分説明し議論する。可能な限りSIIは、教師全員の合意で決定したい。そのために、日常的にプロジェクトの進行状況を他の教師に伝え、反対意見にも十分留意する。こうして、全教師の教育への思いをSIIとして共通言語化する。

STEP 4 具体的な取り組みと 計画を決める

次は具体的な取り組み内容を決めていく。SIIに合致しているかを基準にカリキュラム編成や行事の精選を進める。これらの作業は、校内プロジェクト

だろう。

また、00年度からスタートした学校評議員制度を、地域に開かれ、かつ地域の期待に応えられる高校となるためにうまく活用していくことも、これらの課題となるのではないだろうか。

幅広い科目の中から自分の興味に基づき、学年に関係なく学びたい科目を履修することができ（単位制）、個性を伸ばせる主体的な学習が可能になる点にあるとされる。総合学科に限らず、普通科においても3年間で定められた単位数を習得すれば卒業できる単位制の仕組みを導入する高校も増えている。

総合学科や単位制高校卒業者の進路は、国立大進学から就職まで多様だ。だが中には進学重視型の高校も見られる。それらの高校では、生徒が志望大のタイプに応じた授業を選択し易い単位制の強みが活かされている。

しっかりとした教育方針の確立と、それを実現できる条件の整備の伴わないままの新しい制度の導入は、かえって高校の荒廃をもたらしてしまう危険がある。しかし、自校でどのような教育内容をどんな教育方法で実現していくのかを考え抜いた結果、新しい制度や仕組みの導入が必要という結論に達したのであれば、高校として積極的にチャレンジする方向も考えられるのではないだろうか。

トの下にテーマごとにくいつかのグループ（分科会）を設けて行われるケースも多い。もちろんそこで練られた案も、職員会議に提出して教師間でよく話し合い、合意を図ることが大切だ。

STEP 5 保護者・地域への 説明を行う

保護者や地域への説明会を開催してSIIとそれに基づく取り組みを理解を得る努力も必要だ。何をしようとしているかを知らせることは、高校への信頼感につながり、魅力アピールする機会にもなる。学校評議員制度などを活用して、保護者や地域の学校改革への参画を求めることも考えられる。

魅力ある高校づくり実現への5STEP	
STEP 1	学校改革プロジェクトを発足させる 熱意と力量のある教師を中心に、数名からなる校内プロジェクトを立ち上げる
STEP 2	自校の教育課題を明確にする 幅広い層へのアンケートを通して、自校の抱えている課題や周囲のニーズを把握し、SIIを立案
STEP 3	SIIを全教師の共通言語とする 職員会議にかけ他の教師の合意を得る。日常的にプロジェクトの進行を伝え、反対意見に留意することも重要
STEP 4	具体的な取り組みと計画を決める 取り組み内容、カリキュラム編成などは、各テーマごとにグループ（分科会）で進行
STEP 5	保護者、地域への説明を行う SIIとそれに基づく取り組みは、保護者や地域への説明会を通して校外にもアピールする

特集
魅力ある
高校への
挑戦

No.1より
オンラインを目標に

授業が魅力的な
高校になる

到達度学習で、生徒全員の 学力を把握して引き上げる

山梨県・山梨学院大附属高校

山梨学院大附属高校の研究部では、どうすれば生徒が意欲的な姿勢で臨む授業を作れるかが、よく話題になっていったという。研究部とは同校の分掌の一つであり、生徒指導や学級運営など様々な教育技術の研究開発を担当する組織だ。研究部では90年度より学習指導の研究に着手。まず、各教科に呼びかけ、生徒が目を輝かせて学習に取り組むための指導改善案を探ってもらった。だがこれといった特効薬が見つからないまま2年が過ぎたとき、研究部内から到達度学習が提案された。

全教科で到達度学習を取り入れる

92年度から、同校では到達度学習を芸術や体育を含む全教科に取り入れた。到達度学習では、生徒が身に付ける能力を具体的に「行動目標一覧」として記述しておく(表参照)。ちなみに同校の社会科が94年度に作成した世界史の「行動目標」は、791項目にも渡る。そして、教室にいる生徒全員がこの

学期の最初に 定期考査の問題を作成

研究部が職員会議で到達度学習の提案をしたとき、当初は難色を示す教師も少なくなかったという。当時から研究部にいた藤原剛先生はこう語る。「先生方はそれぞれ独自の学習指導理論を持っていますから、反対する先生が現れるのは予想できたことです。しかし研究部としては、現状打破のた

めにも何とか到達度学習を探り入れた。そこで、山藤常雄先生*の指導を受けながら、先生方に到達度学習を理解してもらったことから始めました」

研究部は、国語、英語、数学、理科、地歴公民科から各1名ずつで構成されている。そこで各メンバーがそれぞれの科目で先進的に到達度学習を実践し、積極的に研究授業を展開した。そして機会あることに他の教師への説明の場を設け、生徒の学習意欲を高められる到達度学習の魅力について訴えた。

また到達度学習には、具体的に体系化された到達目標の作成が必要だ。それには多大なエネルギーを要する。そこで研究部ではいきなり到達目標作りを取り掛かるのではなく、教科ごとに4月のスタートの時点であらかじめ中間テスト、期末テストの試験問題を作ってもらったことにした。定期テストの問題作成を最初に行うことで、教師は「1学期は、この内容はこのレベルまで生徒の学力を引き上げなくてはならない」という明確な目標を持って授業に臨むことができる。こうして、定期テ

山梨学院大附属高校

1956年設立。中高一貫の共学。普通科と英語科を設置。高校の生徒数は901名。00年度入試では、山梨医大、東北大、筑波大をはじめ44名が国公立大に合格。私立大では、早稲田大、慶応大、上智大、山梨学院大をはじめ302名の合格者を出した。水泳部、空手道部では世界レベルの選手を輩出したほか、多くの部が全国大会に出場。

ストの問題作成を足掛かりに到達目標を順次洗い出し、目標相互の構造を分析しながら、「行動目標一覧」を作成していった。徳益新一先生はこう語る。「各教科が『行動目標一覧表』を最初に作ったのは、到達度学習を導入して2年後の94年。それも教科書の単元を網羅したのではなく、できる部分だけを行動目標化してもらいました。先生方に多大な負担を強いいるのではなく、やれることをやってもらいながら、少しずつ到達度学習の魅力を理解してもらったことが大切だと思ったからです」

私立山梨学院大附属高校
教職歴22年。
国語科担当。「生徒の気持ちを理解しながら指導していきたいです」



徳益新一
Tokunishi Shinichi



藤原剛
Fujiwara Toshiyoshi
私立山梨学院大附属高校
教職歴12年。英語科担当
「教師も学習者として、生徒と一緒に学んでいきたいです」

行動目標一覧表(一部抜粋)		
基本概念	下位概念	行動目標
地理歴史(世界史)	1. 化石人類の進化	実年代・地質年代・史的年代・考古年代・化石人類の経済・社会・文化について一覧表を作ることができる 猿人・原人・旧人・新人と化石人類を分類することができる
	2. 現世人類の出現	現世人類の大陸横断を、地図を使い説明することができる 石器製作技術の進歩を例に、人類の進化の跡をまとめることができる
	3. 後期旧石器時代の文化	精神文化の発達を例に、人類の進化の跡をまとめることができる ヒトが人間に成長するまでの2度の運動革命(直立と歩行)が、脳の発達を生み道具を持てたことを説明できる 脳の容量の比較で化石人類を評価するとい誤った見方を論理的に批判できる 「どうやって」猿が人間に進化したのか、どうすれば人類の祖先が分かるのか、進化の跡を図表でたどることができる 人類の祖先がどう暮らし、どうやって他の動物と戦ったかという視点から、猿からヒトへの進化を説明できる 直立二足歩行が手に労働の負担を負わせ、労働が生物としてのヒトを人間にしたことを説明できる 火が安全や明かりのためだけでなく、食生活を豊富にし脳の発達を生み、人類の進化に大きな影響を与えたことを説明できる
2. 文明への歩み	1. 農耕・牧畜の開始	気候の大変化によって完新世が生まれ、気候区と生活条件から文化圏が分岐したことを説明できる 自然環境の変化に対し、人類がどう対応していったのかを説明できる 旧石器時代と新石器時代との比較を表にまとめ説明できる

プレテストと モニターテスト

生徒の学習状況とその変化を細かくモニターすることが、到達度学習を行う上では欠かせない。その結果を、生徒が分かりやすいよう指導に活かすための評価が、形成的評価だ。同校では、学習の前にプレテスト、後にモニターテストと補完学習を採り入れた。

プレテストとは、次回の単元で学ぶ事項に対する生徒の前知識を測るためのテスト。一単元が終了する授業の最後に行われる。問題はシンプルで、教師はそれを職員室に持ち帰って分析し、次の単元に入る前に生徒のレディネス(能力)を把握する。そつする(こと)で、新しい単元は生徒のレディネスに合わせた地点から教え始めることができる。モニターテストは、生徒が行動目標

に達しているかを調べるもの。やはり2〜3問程度の簡潔なもので、教科書の進度の妨げにはならない。同校では最低一単元ごとに実施することとし、一単元の学習内容をできるだけ網羅する設問を心がけた。そして、授業だけ

特集
魅力ある
高校への
挑戦

No.1より
オンラインを目標して

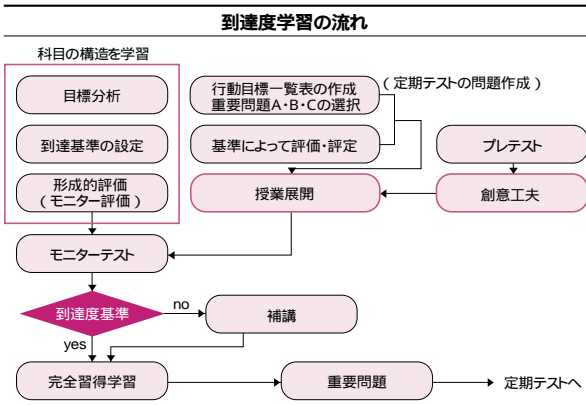
教師の意識変革に つながる到達度学習

到達度学習に教師全員で取り組んだ一番の成果は、各々の中に「生徒をここまで伸ばさなくては」というより明確な使命感が生まれたことだ。結果、進学実績の向上にもつながった。

その後、到達度学習に対して校内の教師に一定程度の理解は得られたと判断し、あとは各教科、教師ごとの取り組みに委ねようと、98年度から全学的な取り組みとしては一旦休止した。

ところが現在、研究部では到達度学習を再び全面的に押し進めることを検討中だという。03年度から始まる新課程ではカリキュラムが大幅に変わるため、生徒にどんな内容をどのレベルで教えるかという再検討が必要になる。

その時に到達度学習の「行動目標」を作っておけば大きな目安になるからだ。「到達度学習では、生徒の学力を正確に把握することが可能です。ここまですべて到達してほしいという具体的な目標を持って授業に臨めるため、教師の意識変革にもつながります」(徳益先生) 高校が学びの場である限り、最も問われるのは授業の質だ。到達度学習は教師の使命を再確認させることで、授業の質的向上の原動力となる可能性を秘めている。そして教師が質の高い授業を展開すれば、自ずと生徒の授業に臨む姿勢も積極的になっていくだろう。



*山藤常雄氏は学習指導・評価の研究者で、『新学習指導要領を具体化する高校教育改革の決め手』(学事出版)の著者

ポランテア活動で
魅力的な高校になる

小中学校・地域と連携し ポランテア活動を展開

島根県立大社高校

島根県大社町にある大社高校は、創立100年を超える伝統校。地域に多くの人材を輩出している地元密着型の高校だ。かつては「大社の子は大社高校だ」という雰囲気があったという。だがある時期から、大社町内の中学校を卒業した生徒が、隣接している出雲市内の高校に進学するケースが目立つようになってきた。一方で同校の生徒数も20年で約600人から1200人に増え、町外からも多くの生徒が入学してくるようになった。町民の間でも「おらが町の高校」という意識が以前ほどは強くはなくなっていた。

ポランテア活動を通して 郷土愛を育成

そんな中で同校は、'98年度から「みんなで守ろうきれいなふるさと運動」という活動に中心となって参加している。これは大社高校と大社中学校、そして町内の5つの小学校に通う生徒と児童が一堂に会して、地元の海岸や公



織も全面的に活動をバックアップした。このように、教育委員会や地域の協力を得られたことが、合同行事を実現できた大きな理由だ。

とはいえ、実現までにはやはり苦労もあった。いくつもの学校が合同で行事を実施するとすると、日程調整の課題がある。また、清掃活動の場所をどこにするかも、交通の便を考えて調整

特集
魅力ある
高校への
挑戦
No.1より
オンリー・ワンを目指して

大社高校

1898年設立。普通科と体育科を設置した共学高校。全校生徒1136名。'00年度入試では、神戸大1名、島根医科大2名、島根大21名をはじめ、国公立大に114名が合格。私立大は、明治大1名、立教大1名、立命館大4名など多数の合格者を輩出。部活動では、体操部、剣道部、サッカー部などが全国大会出場経験を持つ。

小中学校と高校との ネットワークを作る

園の清掃ポランテア活動に従事するというもの。年に一度、わずか1日の行事ではあるが、一つの町の小中高が合同で何かの取り組みを行うというのは、全国的にもかなり珍しいことだ。「きれいなふるさと運動」では、ふるさとを愛する心の育成、モラルの向上、異年齢層の交流による社会性の育成などの目的が掲げられている。'98年当時、大社高校の校長を務めていたのは小田繁俊先生だ。小田先生はこの運動をスタートさせることになった背景を次のように語る。

「私が母校に赴任して最初に力を入れたのが、清掃と挨拶の奨励でした。校内にジューズの自動販売機が設置されているのですが、当時は生徒による器の投げ捨てが目立っていました。そこでゴミ箱を設けて、燃えるゴミと燃えないゴミの分別を徹底させたんです。一方で『おはようございます』『こんにちは』をきちんと口にするように生徒たちに呼びかけました。小さなことでは

ありますが、そこから人としての細やかな心遣いが生まれてくるものですからね。『きれいなふるさと運動』は、そういった活動の延長線上にあります」

もう一つ、小田先生がエネルギーを注いだのが、地域とのつながりを深めながらの高校の活性化だ。'98年の学校創立100周年を期して、教育目標の文言に「郷土に思いを致し心豊かで」という一言を入れた。その上で、小中高合同の清掃活動を提案した。

「私たちが子どもの頃は、放課後は神社に集まって、みんなで一つになって遊んだものです。今は子どもはそれぞれバラバラに遊ぶことが多くなりました。同じ町内に住んでいるのに、一緒に遊んだことがないというのも珍しくありません。それを結び付けたいという思いがありました」

小学生や中学生は、大社高校の生徒と一緒にゴミ拾いをする中で、「自分たちの町のお兄さん、お姉さん」という思いを抱くことができる。それが同校に対する親近感を生み出すという効果も期待できる。



島根県立大社高校教諭
伊藤尚史
Ito Hisashi
教職歴11年。同校には3年目。地歴公民科担当。「郷土・学校・友達に思いを持ってほしい」

しなくてはならない。'99年度に事務局を切り回した高木弘伸先生（現在、佐田分校勤務）は、各小中学校の生徒指導主任に何度も集まってもらい、調整のための会議をもったという。

小中学生の 面倒を高校生が見る

'99年7月8日、「第2回みんなで守ろうきれいなふるさと運動」は、日本海に面する大社町稲佐の浜で行われた。稲佐の浜は『古事記』にも出てくる古い歴史を持つ砂浜で、夏には海水浴客で賑わう。その海開きの前に、海岸沿いのゴミを拾おうというわけだ。

参加者は、大社高校が1年生400人、大社中学校が全学年から538人、5つの小学校の5、6年生が366人の計1304人。稲佐の浜をAからJの10のブロックに分け、A区域は大社高校1年と大社中学校1年1組と2年1組、そして日御碕小学校と遥壇小学校の5年生と組分けしていった。ゴミ袋は町役場の町民生活課が用意し、旅館組合はマイクロバスを出して遠距離の小中学校の児童の送り迎えをした。まさに町を挙げての協力態勢となった。これらの準備は、大社高校が中心となつて、地域の連絡協議会の会合で話し合われる中で決められていった。

そして清掃活動は、小中高生が3人1組になって進められた。「普段は頼りない生徒が小学生や中学生をきちんと指導したり、意外な一面も見られたよつです」（伊藤先生）しかし、改善に向けての課題もある。「これまでは教師が計画しお膳立てした上で、生徒が参加するという感じでした。これからはもっと、生徒が自主性を発揮できる取り組みにしたいと思います」（伊藤先生）

地元の行事にも 積極的に参加

大社高校では、町の行事である出雲阿国歌舞伎の「大お練り」にも生徒たちがポランテアとして参加している。大社町は、歌舞伎芝居の祖といわれる出雲阿国を生み出した土地である。それを記念して、毎年、東京から歌舞伎役者がやってきて、お練りや奉納舞を披露している。お練りではたくさんのお人が提灯や幟（のぼり）を持ち、また御輿（みこし）を担いで通りを練り歩くのだが、その一員として同校の生徒たちも加わっている。商工会議所からの依頼を受けて、'99年度は133人の生徒が町おこしに一役買った。

「参加希望者を募って人選しました。平日のイベントなので授業を休めるこ

ともあって、生徒には大人気でした（笑）。でも最初の動機は不純でも、後で感想を聞いてみると、多くの生徒が『郷土の祭りに初めて触れて感動しました』と言っていました。意義深い体験になったようです」（伊藤先生）

清掃ポランテア活動や地域行事に協力することで、生徒は自分たちのふるさとを見つめるきっかけを持つ。そして生徒と町民が触れ合う機会を増やすことは、町の中の大社高校の存在感を高めることになる。

近年、「地域に開かれた学校」という言葉をよく耳にする。同校の取り組みは、その一つの具体例を示している。

